

アメリカ帝国の終焉 勃興するアジアと多極化世界

進藤榮一 著



●2022ページ
●講談社現代新書（税別760円）

日米「心中体制」に警鐘

トランプ米大統領の登場と英国の欧州連盟（EU）離脱後の世界はどうなるのか？誰しも抱くこの問題意識に著者は、欧米中心の時代が終わり、アジア新興国群などによる多極化時代の始まりという解を見いだす。進行中の重心移動の実相を、豊富なデータと明快な歴史軸から立体的に描いている。

「大米帝国」の没落が言われて久しい。筆者は没落の姿を「金融カジノ

資本主義が加速させた超格差社会への反逆」から説き起こし、経済力や軍事力のみならずデモクラシーというソフトパワーすら「喪失した」と

みる。そしてトランプの「アメリカ・ファースト」を「自国中心外交によって自ら帝国の終わりの時を刻み続ける」と書く。

トマ・ピケティが窒息状態にある資本主義の姿を描いてから、資本主義「終焉論」がもてはやされた。しかし筆者はそれを「神話」と呼ぶ。米欧日など先進国型の資本主義の衰退に代わって、北京やニューデリー、ジャカルタに至る「もう一つの資本主義がアジアで勃興し成長し続ける」ととらえるのである。

資本主義を「終焉」ではなく「蘇生」とみるのが本書のもう一つの特徴だ。

興味深い筆者の視点を幾つか紹介する。第一にテロリズムとポピュリズムという「妖怪」は1世紀前、工業革命に伴うグローバル化時代にもテロと革命という形で、アジアで欧州でロシアでも現れた。第二。アジアをけん引する中国の台頭をみて「中華帝国の登場」と見てはならない。勃興するアジアは、一つ一つの国が単体として台頭しているのではなく「大地域としての経済社会力」とみる。米国が中国かという安易な二者択一論への戒めでもある。

第三。理念先行の欧米的思考様式に対し、アジアでは実態が先行し理論づけは後から行われる。著者はそれを十分意識して、東アジア単一経済圏の成立は「事実上」の地域統合であり、法制度の積み重ねからなるEU

（欧州連合）のような法制度上ではないと論述している。このほか、後発国が先進国にキャッチアップする「雁行発展モデル」を否定し、途上国が先進国に飛びつき飛び越す「蛙飛びモデル」を提起するなど、刺激的な問題提起が随所にある。重心移動の一端に触れることができる。

いまわれわれは、危うい「綱渡り」をしている。トランプ氏が北朝鮮への軍事先制攻撃をちらつかせ、安倍晋三首相がそれを支持しても、反対の声はほとんど聞こえてこない。逆に安倍支持率は上がる一方だ。

敗戦後の日米基軸体制を「当然の前提」とする思考が、いかに骨の髄まで染み込んでいるかを改めて思い知らされる。そんな日米「心中体制」に筆者は警鐘を鳴らしながら、勃興するアジアの一員としてわれわれはどんなポジションをとるべきかを突き付ける。

（共同通信客員論説委員

岡田 充